日蓮大聖人御書全集

じゅりょうほんとくいしょう

寿量品得意抄

新版
2141
～
2143

寿量品得意抄

教主釈尊、寿量品を説き給うに、爾前・迹門のきき挙をあげて云わく「一切世間の天・人および阿修羅は、皆、今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまえりと謂えり」云々。

この文の意は、初め華厳経より終わり法華経安楽行品に至るまで、一切の仏の御弟子、大菩薩等の知るところの思いの心中をあげたり。

爾前の経に二つの失あり。一には、「行布を存するが故に、なおいまだ権を開せず」と申して、迹門方便品の十如是の一念三千・開権顕実・二乗作仏の法門を説かざる過なり。二には、「始成を言うが故に、なおいまだ迹を発かず」と申して、久遠実成の寿量品を説かざる過なり。この二つの大法は、一代聖教の綱骨、一切経の心髄なり。

迹門には、二乗作仏を説いて、四十余年の二つの失一つを脱したり。しかりといえども、いまだ寿量品を説かざれば、実の一念三千もあらわれず、二乗作仏も定まらず。水

にやどる月のごとく、根無し草の浪の上に浮かべるに異ならず。また云わく「しかるに、善男子よ、我は実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫なり」等云々。この文の心は、華厳経の「始めて正覚を成ず」と申して始めて仏になると説き給う、阿含経の「初めて成道す」、浄名経の「始め仏樹に坐す」、大集経の「始めて十六年」、大日経の「我は昔道場に坐す」、仁王経の「二十九年」、無量義経の「我は先に道場にして」、法華経方便品の「我は始め道場に坐す」等を、一言に大虚妄なりと打ち破る文な

り。

本門寿量品に至って始成正覚やぶるれば四教の果やぶれ、四教の果やぶれぬれば四教の因やぶれぬ。因とは修行、弟子の位なり。爾前・迹門の因果を打ち破って、本門の十界の因果をときあらわす。これ則ち本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界にそなえて、実の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。

こうしてかえってみるときは、華厳経の台上盧舎那、阿含経の丈六の小釈迦、方等・般若・金光明経・

阿弥陀経・大日経等の権仏等は、この寿量品の仏の天月のしばらくかげを大小のうつわものに浮かべ給うを、諸宗の智者・学匠等は、近くは自宗にまどい、遠くは法華経の寿量品を知らず、水中の月に実月のおもいをなして、あるいは入って取らんとおもい、あるいは縄をつけてつなぎとどめんとす。これを天台大師、釈して云わく「天月を識らず、ただ池月のみを観ず」と。心は、爾前・迹門に執著する者は、そらの月をしらずして、ただ池の月をのぞみ見るがごとくなりと釈せられたり。また僧祇律の文

に「五百の猿、山より出でて、水にやどれる月をみて入ってとらんとしけるが、実には無き水月なれば、月とられずして水に落ち入って猿は死にけり。猿とは、今の提婆達多・六群比丘等なり」とあかし給えり。

一切経の中にこの寿量品ましまさずば、天に日月無く、国に大王なく、山海に玉なく、人にたましい無からんがごとし。されば、寿量品なくしては一切経いたずらごとなるべし。根無き草はひさしからず。みなもとなき河は遠からず。親無き子は人にいやしまる。詮ずるところ、寿量品の肝心

南無妙法蓮華経こそ、十方三世の諸仏の母にて御坐しまし候え。恐々謹言。

四月十七日

日蓮　花押